



- ①進んで学ぶ生徒
- ②心豊かな思いやりのある生徒
- ③たくましい生徒

## 凍れる音楽

校長 岡田 英行

寒い日が続き、最低気温が氷点下になる日もあります。何をするのも億劫になりがちですが、吹中生の直向きさには感動しきりです。清掃は冷たい水でぞうきんを絞り、部活動（現在は休止）では寒風にもめげず最後のグラウンド整備まで欠かしません。強化中のコロナ対策では、寒くても窓を開けて換気も行っています。「やって当たり前、できて当たり前」のこともおろそかにしない姿は、まさに今年度の合言葉『当たり前への挑戦』です。しかし、さすがに厳寒の季節は辛いに違いありません。特に冷え込むのが早朝で、地面は凍って霜柱となり、プールや池・水道管も凍り付いて身も凍りそうです。「凍る」とは、水分が氷となって凝固する現象ですが、フリーズしてピタッと動きを止めた状態を指す表現でもあります。



奈良・薬師寺の東塔は、『凍れる音楽』と称されます。薬師寺は、今から1300年ほど前の奈良時代に建立された寺ですが、長年の風雨や幾たびの戦火をくぐり抜け創建当時のまま残っているのは東塔だけです。高さ34mの木造建築で、釘を一本も使っていないというのですから、それだけで驚きです。大小六つの屋根があり六重塔に見えるものの、実は三重塔です。大きな三つの屋根の下にそれぞれ飾り屋根が設けられ、曲調の変化に富んだ名曲になぞらえて『凍れる音楽』と呼ばれます。音楽は流れてしまえばそれで終わりですが、東塔のリズミカルな建築美は永遠に形をとどめているという意味だと思います。



東塔で特に名高いのが、先端にある青銅製の水煙に透かし彫りされた24体の飛天像です。衣をなびかせて舞う姿は優雅で、工芸品としても十分通用します。ところが、据えられているのは吹上中校舎をタテに2つ重ねてもまだ届かないほどの高い場所です。下から見上げても、詳細まで鑑賞することはできません。かつては、寺を訪れた修学旅行生に、お坊さんが「見えないものに向かった無限の努力」「最小の効果をあげるためにも最大の努力を惜しまない精神」として説法してくれました。奈良時代の人たちが当たり前としたであろう“愚直さ”を思うと、人が見ていなければ手を抜いて楽をしたがる怠け心は、ただ恥ずかしいばかりです。

東塔は、約12年間にわたる全面解体修理のため、しばらく見ることはできませんでした。昨年に落慶法要をしてから一般公開されるはずでしたが、コロナ禍で延期され、今年3月1日から特別開扉される予定です。今年6月に計画されている現2年生の修学旅行では、機会があればぜひ薬師寺に足を運んで心に刻んで来てほしいと思います。

### おかげさまで開校75周年 ⑨

吹上中の金曜日は、ノーチャイムデーです。「チャイムの代わりにお互いに声をかけ合い、節度ある学校生活にしよう。」という生徒会の呼びかけから始まりました。しかし、最初から順調に進んだ訳ではなく、本格実施前には半年以上もの根気強い取組がありました。まず、平成30年年5月から毎月の最終金曜日にはチャイムを止めました。第70期生徒会執行部が、時計を見て行動するよう呼びかけたのですが、動きは遅れ気味でした。10月に第71期へとバトンが渡されてからも取組は継続され、時間着席に高い目標を設定して、授業ごとにチェックが繰り返されました。一進一退の状況が続く中、執行部の本気さが徐々に全校生徒に伝わり、12月には見事に目標を達成することができました。そこで、翌年1月から正式に毎週金曜のノーチャイム実施となりました。現在は、「金曜の無言清掃」と並ぶ誇らしい伝統になっています。